

デュルケム道德論の倫理的意義
——義務と善の調和を目指して——

立命館大学大学院 文学研究科 哲学専修 堀内智吉

規範倫理学は、我々が行為指針とするべき規範を探究する中で様々な倫理理論や倫理原則を提示してきた。その中でも、主軸となってきたのは功利主義とカントの義務論であろう。他方で、近年ではその対抗理論として徳倫理学やケアの倫理、現象学的倫理学などが登場した。いずれも、功利主義やカント主義が見落としている点を指摘し、独自の観点から倫理について語っている。本発表で取り上げるエミール・デュルケムの道德論もまた、それらと同様の性格を持ったものとして理解することができるだろう。

エミール・デュルケムは、第三共和政期のフランスで活躍した社会学者であるが、その関心は生涯にわたって道德に向けられていた。彼の道德研究は、ドイツ留学の報告論文「ドイツにおける道德の実証科学」から始まった。同論文においてデュルケムは、当時のドイツで注目されていた科学的な道德論に興味を持ち、功利主義と義務論しか持ち合わせていないフランスの道德思想に警鐘を鳴らした。それ以降の研究においても、彼の目的は新たな道德論の確立にあったと言っても過言ではない。このようなデュルケムの道德論は、ある種のメタ倫理的思索だと評されることがあるが、全体としてデュルケムの道德論の倫理的意義を示唆する論考は多くない。そのため、本発表ではデュルケムの道德論の内実を概観したうえで、それを現代の倫理学でなされている議論と比較することを通じて、その独自性を明らかにすることを目指す。

そのために、まずはデュルケムの道德論の集大成である論文「道德的事実の決定」における主張を確認する。同論文においてデュルケムは、道德的現実を客観的に観察可能なものとして捉え、道德的現実を構成する個々の道德的事実が持っている要素が何であるのかを抽出し、それが義務と善であることを示している。続けてデュルケムは、なぜ道德がその二つの性質を持つのかについて、社会と個人の関係をもとに説明を加え、社会を道德の最高目的として位置付けることによって、功利主義や義務論とは異なる方法で道德を論じることができると主張する。しかし、同論文の主張だけでは、なぜデュルケムの道德論が既存の規範倫理学に対して優位なものであるのかが不明瞭である。

そのため、社会的事実注目することがなぜ重要であり、またそれに注目しなかった規範倫理学理論がなぜ退けられるべきなのかを、倫理的視点からの再評価する必要がある。そこで本発表では、『社会分業論』と『道德教育論』におけるデュルケムの主張に手がかりを求める。前者では、快樂と幸福を区別することによって功利主義を批判するというデュルケムの立場が明確に描かれている。後者では、道德の持つ規範性と社会の持つ権威に関する議論がなされており、これはカントの主張(道德の義務的性格・神の扱い)を踏襲しつつも、その中に幸福主義の存在余地を生み出すための理論を展開したものである。これらの背景には、功利主義や義務論の掲げる「道德」は実際の社会の道德的要望に適応できずに「死んで」おり、社会的事実注目することだけが「生きた道德」を捉えることを可能にするというデュルケムの主張がある。そしてそれは、功利主義と義務論の対立を解消する、幸福を巡る新たな見解を提示するものとして描き出すことができるだろう。